ドクター・シーラカンスと呼ばれて

中村芳郎（36 回）

「聴診は左右のイアピースの間で行う」　その間をボンヤリさせていては、何にもわからない。私は学生の講義では言ったかもしれないが、患者さんの前の実習の時には一度しか言っていない。その一度は、atrial fibrillation の患者さんを聴診させた時に「どう」と言ったら学生の返事が「4 音が聴こえます」でした。私はあせって「f wave の間に心房収縮のはっきりしたものがある場合もあった？」と一寸不安になったが、それらしい音は聴こえず、上記の言葉を言ってしまった事を思い出します。

内科学教室で、私のした事の 1 つは鬼塚式聴診器を終わらせた事でしょう。ラパポール・スプラーグの聴診器を特意気に使ったが流行させられず、そのうち皆リットマンになってしまった。だが、だれもその機能を云々することもなく、私は老年科に行けと言われました。

内科から独立した老年科を作れとの話でしたので、私の弱い神経内科から助教授をだしていただけないかと、後藤教授にお願いに上がったところ、一言の下に「独立した老年科の考え方はない」と断られてしまいました。それでも私に教授の肩書を「どこからか？」与えられ、別館で人間ドックの仕事を主に行うことになりました。そのあたりの複雑奇怪な物語は、私が墓場まで持って行くべきものと思っています。

老年科として、学生に講義したかったことは、Thanatology でしたが、今、自分が面している問題で述べられる事も少なく、ただボンヤリと逝ける日を待つ身となっています。

「老年科に来ないかな」と話したことのある一條真琴先生にバトンを渡します。